大東亞精神（上）[[1]](#footnote-1)

大東亞文學者大会の發言

（1）香山光郎[[2]](#footnote-2)

大東神の立といふのは當つて居らぬ。大東神といふ言葉も、今日としては必要であらうが、本當は當つて居らぬ。大東神とは、眞を指すのであつて、眞は大東ばかりでなく全地上、否、十方三に遍當をするものでなければならぬ。

それ故、私たちが今叫んでゐる大東神とは決してある目的のためにでつち上げたものではなく、古今に通じて渝らず、中外に施して悖らざる眞でなければならぬ。

この眞をわれわれ東人は何と呼んでゐたか。わが日本においては鏡のく清く明るき心といふ、また八紘爲ともいはれ、支においては仁義といつたり、自然といつたりしたのであり、釋迦はといひ、空、寂ともいつたが、つまるところ、この精神は己をてることである。私利私を抛つことである。この點が米と本に相対蹠する點である。

然らば人生本然の眞理たる清明心、仁義、はのいづれに行はれて居つたか。それはたゞ日本にのみあつたといひ得る。以来三千年、この人の寶物を、生命を健気にも持して來たのが日本である。

而してを通じての御を全に行はせられる御方は萬世一の日本の　天皇のみにあらせられる。　天皇には末の私の心もあらせられぬ。　天皇が宵旰じ給ふことは、唯一にも萬兆の安であつて、それ以に何物もありやうがない。この御心を大御心と申上げるが、日本人はこの大御心にし、その大御心をして、小さいながら應分のを行ふ。そして日本人は力ながらもこの大御心に近づかうとする。これが日本人の生活目標である。

それ故日本人には人がない。自分は　天皇のものなりといふことのみをずるから、天皇に對するとあるのみである。ち、日本人が忠といへば、それはの國の忠とはふ。主從關ののための忠ではなく、父子のく天關の忠である。これはよりもである。「海ゆかば」とか「みたみわれ」とかいふのは、そのである。しかり、そのである。（『京城日報』1942年11月11日）

大東亞精神（下）

この精神こそ　天皇におかせられては皇道と申し上げ、臣民にあつては日本精神とんでゐるのであるが、日本は實にこの精神の上に立てられてゐるのである。この精神をして日本の眞を知らうとするのは、もを無して、自然現や人事現を知らうとするやうなものである。

なる程、日本には支も入つた。度も入つた。米も入つた。しかしこれらのの流入を、無人境に人が移したくにへてはならない。それ等のは、日本に入つて日本精神にせられて、ますますその特色を發したのである。

こゝで私は私のに達したい。東本然の精神のあり方はでない、日本である。非利大東精神は、日本においてめらるべきであり、この精神こそは、よく東諸民をして相し、相倚らしめるに足る精神であるのみならず、全人をふべき眞の道である。

榮各國の學者諸は、諸の同の生活の中に、この日本精神なるものを選ぶがよい。そして諸の同に清明心をゑつけるがよい、日本の眞の、眞の心をへることも、諸の同にこの精神をゑつけるよすがになり、よき手本になるからである。終りにみ、私はもう一言つけ加へるがある。

それは、この精神のために、我等は先づこのひに勝たねばならない。萬一後の日本の度に就て、榮諸中にしでもひを持つものがありとすれば私は申上げる、日本人人の中には嘘をいふものがあるかもしれない。しかし、畏れいことであるが　天皇の書には決して僞りがないといふことを。

諸は日本をしてひたい。日本精神を學んでひたい。かつて米精神を學んだを以て日本精神を學んでひたい。かゝる國な會合の上、私の言葉にはをしたがあるかもしれぬ。しかし今はそんなことをいつてゐる時ではない。まして我等は學者である。駆引きや令は下手なである。

同の目のために、同のとつてゐることを考へ、相にひ、相俱に勝ち、相にみよき大東を建設しやうではないか。（『京城日報』1942年11月12日）

1. 『京城日報』1942年11月11日、12日の朝刊2面に連載。李光洙は11月4日と5日に東京で開催された大東亞文学者会議に出席してこの発言をした。 [↑](#footnote-ref-1)
2. この回は名前の前に（1）があるが、翌日はついてない。 [↑](#footnote-ref-2)